

道路工學の新權威 工學博士 藤井眞透氏

机の上の研究だけでも一人の博士が現はれる事は結構な事であるが、工事現場に於ける研究から一人の博士を得た事は尙一層の尊い事である。

工事畫報が近代の工事關係工學博士號を特輯せんとしてある間にすでに数名の新博士が現はれた。而して編輯準備の進まない内に急に最近又一人の記念すべき新工學博士が現はれた。それは我國近代の道路工學に最も關係の深い内務技師藤井眞透氏である。

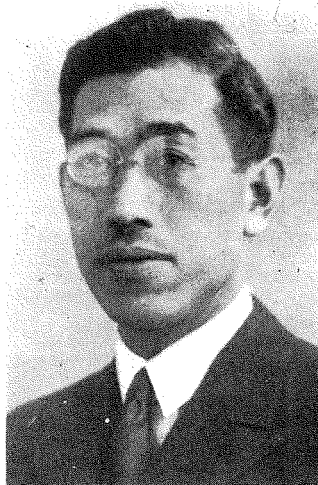
我々は明治神宮の外苑を散歩して、あの心地良い舗装道路の感じを忘れる事は出来ない。神宮外苑が今日の野球場を以て有名なるは云ふまでもないが、運動競技場としての外苑に若しあの舗装道路が無つたら如何に不調和なものであらう。外苑に於て他の構造物を忘れ得るとしても諸君はあの道路を忘れてはならない。

今から八年前、工事畫報創刊の際に我社同人は早くもあの神宮外苑の模範的道路工事に目をつけたものである。其頃は丸ノ内とは言へ我社附近の街路は半日の雨でさへ、歩行に堪へぬ程の泥濘となるのであつた。

其頃である信濃町停車場の直ぐ近くに、平家の古ぼけたバラックの一室に、黙々とコンクリートの實驗をなし、アスファルトのテストをなしつつあつた人こそ實に今日の工學博士藤井眞透氏であつた。其以來我社同人は幾度かあの薄暗いバラックを訪ねては藤井學士からスラングテストやフローテストの状況と其強度の實際など見學した。當時コンクリートの理論のみは口にする人があつても、之を實驗して工事に實施する技術家は殆んどないと云つても良い位

であつた。我社としても藤井氏の眞剣な態度にいたく刺戟された次第である。其後に藤井氏の工事現場生活は短かつたが、我社は細大漏さず氏の工事状況を寫眞に記事に報道したのである。

若し我々雑誌の努力が幾分か斯界に認められ、而して近年の日本の工事界が表裡ともに多少進歩したとしたならば、それは藤井氏の知き先覺者の犠牲的努力の賜物であると思ふ、藤井氏はたとへ學位を得られないとしても、あの研究的努力に對しては國家は何等かの名譽を以て酬ひねばならぬ筈だと我々々思つてゐた。



藤井眞透氏

然るに藤井氏が本來の研究を一歩進めて今回、日本の國情に立脚した路面舗装の規準に關する基本的研究を發表されたのが學位論文となつたのである。

日本の風俗習慣と俱に交通狀態や、溫度や湿度や、車の種類や其速度等に對し、安全にして且つ經濟的な路面の規準が茲に初めて示されたのである。此論文はすでに獨逸の専門雜誌に出てゐる様であるが、我工事畫報にも其概要を紹介したいと思つてゐる。

藤井眞透博士は宮崎縣都城の人、大正三年東京帝大を出て直に内務省に入り、牧彦七博士の指導をうけた。目下は物部博士が所長たる内務省土木試驗所の技師にして、東京帝大の道路工學を擔當し、且つ明治神宮外苑評議會の委員等を兼ね、昨年来國に開かれた萬國道路會議に日本代表として出席し、歸朝以來内務省關係の講演會や、講習會に引張られて非常に多忙の様である。幸に氏は頑健にして各團體にも盡力し、益々道路工學技術の爲に盡力されつゝある。

藤井博士の趣味と言ふものを聞いた事がない。恐らく讀書研究と工學的實驗をする事が趣味なのであらう。